



道標 は「どうひょう・みちしるべ・みちじるし」と読み、他国との往来が緩和された江戸時代中頃から街道の要所に立てられるようになった。

道標は公に設置されるものは少なく地域の有力者や有志によって寄進され、材も当初は木製で次第に石製に代わってきた歴史がある。

その道標が木知原には3ヶ所に残されているので紹介しましょう。

① 馬頭観音像脇の道標

道標は享保七寅七月(1722)に立てられている。(壬寅・みずのえとら)

享保と言えは8代将軍吉宗の時代で道標のトップバッターである上に石づくりであることが驚きであり貴重な史跡である。(公私は不明)

この道標から当時の木知原を思い描くと・・・

江戸時代中頃の木知原村



木知原は享保年間に道標が必要なほど多くの旅人が行き交う賑わいのある村になっていた証である。その背景には1681年に渡船場が開業された事と時を同じくして起きた巡礼ブームとが重なった事が推察できる。木知原村は巡礼の主要街道が通る村となり一気に人通りが増えたのでしょ。

道案内の「右・岐阜みち・左・せきみち」とあるは、

- ◆「右・岐阜みち」とは、中山道の加納宿や河渡宿への案内。(東山道利用者も多かった)
- ◆「左・せきみち」とは、関を通り中山道の太田宿から長野(善光寺)への案内である。

当初は公民館の西側(旧街道の分岐点)に立てられたが、その後現在の場所へ移されている。

旅人目当ての出店も多く立ち並ぶなど近郷に先駆け賑わいのある村に一変したことは特筆すべき事と思う。兼業農家の先陣を切ったのも木知原村でしょ。補他郷からの出店も明治末まで多く残っていた。



② 長谷川脇の道標



左せきみち

欠落
右むらみち

③ 下岩崎の道標



左
谷汲山道

右
根尾越前道



《時代の変遷が一目で》

根尾越前道

板状石の道標で右半分が欠けている。

- ◆左側には「左せきみち」と刻まれている。
- ◆右側には左の地藏尊と同じ「右むらみち」とあったと思う。(地藏左ぜんこうじとある)
- 寺洞辺りで川内村と村中への分岐点に立てられたが期日は不明。江戸中頃?

「明治廿八年六月一日・林代蔵建之」とある。

- ◆明治と聞くと比較的新しい感もするが渡船の時代である。
- ◆渡船場への谷汲山道を案内しながら多くの旅人・巡礼・人力車・馬車等を見てきた道標である。しかも根尾川の自然石で作られており懐かしさを身近に感じる。
- 車の前辺りに民家がありほぼ現在の位置に立てられた。

付記：中山道の赤坂宿を起点に池田→揖斐→小野坂→谷汲山華嚴寺までの道を「谷汲山道(谷汲山華嚴寺巡礼街道)」と呼び古くから賑わっていた。木知原の谷汲山道は村内のみの名称。

：中仙道→中山道の表記は、江戸時代の享保元年(1716)に「山」と書くよう統一された。